

博士学位請求論文審査報告

報告番号 甲 乙 第 号

氏名：橋本 陽介

論文題目

物語における時間と話法の比較詩学—日本語と中国語を中心にして—

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授 文学研究科委員	関根 謙
副査	慶應義塾大学文学部教授 文学研究科委員	杉野元子
副査	慶應義塾大学文学部准教授	喜田浩平
副査	東京大学大学院総合文化研究科准教授	林 少陽

論文の概要

本論文は「物語の比較詩学」を個別言語に密着した分析を通して精密に行おうとする意欲的試みである。本論文において橋本陽介は近年の英語・フランス語・日本語・中国語のおびただしいテキストを精力的に収集して、これまでの物語論で行われてきた欧米言語に基づく一般的構造の分析を、根底から捉えなおそうとしている。彼は特に日本語と中国語に着目し、その言語的特性が物語の生成においていかなる特徴を有しているかを明らかにした。本論文の目指す「物語の比較詩学」は、たとえば中国文学批評などで主流だった「解釈学」を方法として厳しく退けようとする概念であり、特に中国文学研究においては全く新しい研究領域の提示といえることができる。たしかに物語論の術語を使用した構造分析はこれまで日本でも中国でも行われてきてはいたが、本論文はそれらの先行理論が内包する欧米言語基準の単純な借用を批判し、テキスト言語学的な見地にに基づき、個別言語における物語の言語使用を比較、分析している。これによって、それぞれの言語の物語における言語意識が系統的に解明された。とりわけ日本語と中国語における「時間」と「話法」の概念についての問題提起は鋭く、言語の壁を乗り越える普遍的理論の可能性が示唆されている。

本論文は三章、29 節からなっている。第一章では、欧米を中心に作り上げられてきた物語論の理論と思想を振り返ることにより、原則的な一般論とされた多くの概念が、実はフランス語等の文法に基づく発想であることを指摘し、「比較詩学」の根源的意味とその可能性について議論している。第二章では、物語の時間について、日本語と中国

語に基づいてその語り方を検証している。第三章では、物語における空間論、つまり「語る声」「視点」について、日本語と中国語からそれぞれ明らかにしようとしている。本論文はこれらの議論を通して、日本語と中国語における物語の時間と空間の認識について詳細な分析を進めていく。

目次

序論

第一章 物語論の術語の再検討から比較詩学へ

0. はじめに

1. 「物語」とは何か
2. 物語内容、物語言説、語り
3. 物語における言表主体について
4. 物語の時間
5. 物語る「声」と視点、話法

第二章 語りの位置と物語における時間

6. はじめに

- 7 日本語における物語の時間
8. 言語学から見た日本語のテンスとアスペクト
9. 物語におけるタ形とル形の交替、テンスとアスペクト
10. 日本語の語りの位置はどこにあるのか
11. 現代日本語物語におけるル形とタ形の用法
12. 物語現在におけるタ形とル形の交替
13. 物語の特殊用法
14. まとめ

15. 中国語における物語の時間

16. 中国語における語りと語られる物語世界の位置関係に関する先行研究
17. 中国語物語におけるダイクシスの用法から見る語りの位置
18. 中国語における物語現在的語りと非物語現在的語り
19. 中国語物語における時間の展開とアスペクト助詞の“了”
20. アスペクト助詞“了”と時間の展開
21. ディスコースと“了”
22. まとめ

第三章 語りの位置と話法

23. 話法と「距離」
24. 「話法」とは何か
25. 話法の言語間比較へ

26. 物語世界の客体化からみる語りの位置と間接度

27. 「物語世界の客体化」と「距離」

28. 中国語における「距離」と話法

29. まとめ

結論

例文出典

参考文献一覧

論文の内容

第一章「物語論の術語の再検討から比較詩学へ」:「物語論」では、物語の一般的構造の記述が目指され、「語り手」「語る声」「視点(焦点化)」「語りの時間」など、文学批評に使用される重要な概念が整理されたが、80年代以降は理論の更新が行われていない。この認識に立って本論文では、欧米における既存の議論を再検討することにより、言語間の比較を行うにあたってどこにさらなる開拓の余地があるかを探っている。本章では初めに語り手という概念に関し、その存在を肯定する立場と否定する立場の議論を見ることによって、物語における創作主体に関する検討を行っている。この検討により、現実の場に話し手と聞き手がいて、「いま」と「ここ」が定まっている場合と物語とでは、言語表現が異なるという点で両者の立場が一致していることが確認される。

これを踏まえ本章では「物語の時間」について、既存の理論が英語やフランス語などの時制体系を前提としていることを論じ、物語の場合、現実の会話のように「いま、ここ」が定まっている場合と時間の表し方が異なることを指摘する。そして、日本語や中国語によりそって分析すれば、新たな理論が導き出せる可能性があることを論じている。次に「語る声」「視点」について検討し、これらが文法的には「話法」に関わる問題であるが、その理論も三人称代名詞と過去時制を常に用いる言語を前提として作られていることを指摘し、それをただちに日本語や中国語に適用することが合理的ではないことを証明している。この第一章によって、現行の物語論の歴史的総括が行われ、その上で個別言語に注目した場合の新たな展開の可能性が論じられた。

第二章「語りの位置と物語における時間」:本章ではまず先行論文の議論が踏まえられ、一貫して過去時制(小説によっては現在時制)が使用される英語やフランス語等の物語に対して、日本語の小説ではタ形(過去形)とル形(非過去形)が頻繁に交替で用いられることを確認する。その用法に関しては、これまで言語学からのアプローチと物語論からのアプローチから説明がなされてきたが、現在までのところ、タ形とル形が交替する理由や、如何なる条件下でいずれかが選択されるかについては納得できる解釈がなされていないと断ずる。そして日本語の書き手は一定の時間意識にそってタ形とル形を使用しているはずであり、無規則に使用しているわけではないと指摘し、この使い分けを分析できれば、日本語で物語を書くときの書き手の時間意識の分析につなが

ると考える。この認識に立ち、本章では、日本語のタ形とル形の使用から、日本語の物語における時間の展開について論じている。

第 8、9 節では言語学と物語論における日本語のテンスとアスペクトの先行研究を検討している。本論文は、言語学ではタ形は基本的にはテンスと考えられ、発話時点から見ての過去を表すとされているとし、物語論においても、過去に起こった物語を語っているというモデルが取られてきたことを指摘する。そしてこれまでタ形とル形の交替現象において、物語を語る位置と語られる物語現在が同一時間軸に並んでいるという前提を批判し、語りの位置は同一時間軸上にあるのではなく、物語世界の外側にありながら、漸進的に進んでいく物語を俯瞰的に眺めながら語っていることを明らかにしようとしている。第 10 節では歴史的な経緯として、二葉亭四迷の『浮雲』の文体変遷を取り上げ、言文一致後の近現代小説はこの『浮雲』の語り方から、語り手の主体性を減退させたものであることを論じている。そしてここにおいて語りの位置と語られる世界との関係は、『浮雲』第一篇と変わっておらず、物語現在が語りにおける「現在」となっていることを指摘している。本論文はこうすることによって、日本語のタ形とル形の交替が明確に捉えることができると断じている。こうして本節において、日本語で物語る際の言語意識が過去のことを語っているわけではないことが強調される。

以上を踏まえた上で、第 11 節からは日本語の物語のル形とタ形の交替を文法的に説明している。ここではまず、物語の現在を現在とする語り方（物語現在的語り）と非物語現在的語りに分け、非物語現在的語りの文法的特徴として、要約的・説明的になること、語りの場が一次的になること、直接話法が減ることが指摘される。そして物語現在的語りでは、ダイクシスは物語現在を中心としたものが使用可能であることが確認され、タ形とル形の交替を状態性述語と動作性述語に大別して論が進められる。この議論を通じて、状態性述語のタ形には、通常の会話文とは異なり物語現在の時間を進める機能があることが明らかにされる。また動作性述語の場合、タ形が基本的にはその動作の完了を表し、ル形は単にその動作行為を示すだけであるとし、さまざまな用法が詳細に説明されている。本論文はこれによって、日本語の物語におけるタ形とル形の交替が説明でき、またそこから日本語で語る際の時間意識が明らかになったとしている。

第 15 節からは中国語で物語る際の時間意識の問題が論じられる。中国語には文法形式としての時制がなく、形式からの分析が難しいという立場に立ち、第 16 節では言語学と物語論における先行研究を検討し、第 17 節ではダイクシスに注目すると共に、叙述の速度に注目し、語りの位置と語られる物語世界との位置関係を考察している。本論文はこうした中国語のダイクシスの分析により、中国語では日本語と同じく、物語現在的語りの場合には物語現在を基準とすることが明らかになったとしている。

第 19 節からは、アスペクト助詞の“了”の用法に注目し、中国語物語の時間的展開について分析している。本章において、物語では現実の会話文に比べて、明らかに“了”の使用が少ないが、これも物語現在が基準となっているためであることが指摘される。

その上で“了”の付く文は事態の成立を、それぞれの時点で把握する叙述法であり、“了”のないものはその動作行為そのものを示すことが論じられる。本章ではさらに“了”の文脈の中で果たす機能について論じられ、日本語では段落の最初と最後はタ形を使用することが多いが、中国語でも段落の最初と最後に“了”が使用されることが多いことなど、日本語との共通点が指摘され、その理由の考察が進められる。本論文は以上の分析から、中国語の物語においても、物語世界を目の前に置いて、漸進的に進む物語について叙述していることが証明されるとしている。

第三章「語りの位置と話法」：物語における「話法」はこれまで、「自由間接話法」と呼ばれる話法が、主に小説技巧の問題として論じられてきた。本論文では「話法」が、ある文の物語世界の外側からの語りであるのか、それとも内側に属するものなのかを表す文法カテゴリーであることが明示される。この立場に立って「話法」の研究とは単なる技巧の問題ではなく、物語世界をどのような位置取りから語るのかという、より本質的な問題となることが指摘される

第24節では、物語における「話法」とは何かについて分析している。ここでは既存の話法分類のうち「直接話法」の性質について、まず日本語・中国語小説に関して英語等の小説と比較の上で検討が進められる。この検討の中で「直接話法」は「物語現在」に属し、「引用」ではないことが論じられる。そして「直接話法」以外の「自由直接話法」「自由間接話法」「間接話法」と分類されてきたものを、物語世界との「距離」という概念から、連続したものとして捉えていく。この捉え方によって、物語の「話法」の本質が示されるとともに、文法形式の異なる言語間の比較を行うための基礎の構築が可能となることが明らかにされる。

次に第25節では既存の話法分類が英語やフランス語の文法に則っていることを論じた上で、第26節、第27節ではより一般的な方法として「語調」と「物語世界の客体化」を挙げていく。その上で個別言語の文法に則った分析が提案される。第27節ではさらに、日本語の話法分析を進め、英語等の小説では、基本的に物語世界の外側の位置に語りの位置が固定され、そこから客観的に眺められるのに対し、日本語ではその位置はしばしば物語の内部に移動していることが指摘される。そしてその語る位置取りが、話法の分析からわかることが確認され、日本語に即した分析が行われた結果、日本語では、人物の視点に同化して語る場合と、その内的感情、内的言語に同化している場合があることが明らかにされていく。橋本は本研究において、このように人物の視点や内的感情、内的言語に同化する日本語の語りを「オーバーラップした語り」と呼ぶ。そして日本語で物語る際には、書き手の意識自体が物語世界の内部の特定の人物に同化しやすいということを、英語等との比較から明らかにしていく。

第28節からは、中国語における話法が英語や日本語のそれと比較されていく。英語と日本語の話法の比較研究はこれまでもなされてきたが、中国語に関しては現在までほとんど問題とされることがないか、あるいは英語のものを形式の異なる中国語に当て

はめただけだったという認識に立ち、本章では英語等の自由間接話法の翻訳例から検討を始める。そしてこの検討から、原文の人称に変更がないこと、微妙な話法を間接話法の方向に訳すことが多いこと、疑問文、感嘆文への翻訳は原文よりも距離がなくなることなどが指摘される。また、日本語の人物の視点にオーバーラップした語りが、英語などでは人物の外側からの客観的位置からの語りにするか、内面のセリフであるかのように翻訳していることが確認される。さらに文法的な特徴が検討され、中国語は基本的には英語等のように、外側からの客観的な語り方を好むが、人物の内的感情に同化する場合のみ、日本語のような「オーバーラップした語り」になることなどが論じられる。この事実を踏まえ、本章では中国語小説における視点の取り方、内面への同化の仕方が明らかにされる。

以上、第二章、第三章の分析によって、本論文は日本語や中国語を使用して物語る際の時間意識と語る位置について、これまでの物語論、とりわけ中国文学の領域ではほとんど触れられることのなかった斬新な見解を提示している。

審査結果

橋本陽介は本論文において、「詩学」とはある言語を使用した際に、それがどのように思考を規定しているのかを明らかにしようとする研究であると指摘し、そういう立場から行う「比較詩学」がこれまで実際にはほとんどなかったと断じている。本論文はこの立場に基づき各言語による膨大な資料を駆使してこれまでの物語論を総括しているのだが、そこには一貫した理念が認められ、全体を通して野心的で斬新な研究と言える。本研究によって、日本語や中国語の物語において、書き手がどのような立ち位置から世界を語るのか、どのような時間の認識で語るのかが明らかになり、物語理論の新たな領域が開拓されたと評価できよう。

物語における「時間」の検討において、本論文は日本語のタ形とル形の使い分けの分析を追求し、日本語の物語での時間論を作り上げている。この過程で物語における「現在」の時間を厳密に分析し、物語論としてはこれまであまり明確でなかった分野を体系的に総括している。そして同じく中国語の物語における「時間」のモデルに関して、ダイクシスや“了”の分析から精密な検討を行い、それらの語の中国語の物語叙述文中での特徴が日本語の「タ」の使用と多くの共通性が見出されることを指摘している。アジアのこの二つの言語に見る「時間」の概念が、欧米言語基調の物語論でほとんど議論されていないのは、指摘される通りであり、本論文が今後一般的な物語叙述理論の研究にも貢献することが期待される。

本論文では第三章の話法論において、物語の話法の性質について、物語世界を外側から語るのか、内側に入り込むのかという空間論の問題として捉えるのだが、この観点も野心的で新しい。日本語の物語の場合、英語などに比べて物語世界の内部に入り込んだ叙述になりやすいということは以前から指摘されていたが、本論文ではこうした日本語

での語り方を言語学的方法と文学的方法の両面から明らかにしようとしている。中国語の物語における話法論に関しては、本論文の指摘するように、従来ほとんど中国語独自の特性に則った研究はなされていないのが現状であり、本論文がテキストの基礎的な分析作業から着手し、日本語や英語等の言語との対比を念入りに行って、中国語の語り方の特徴を明らかにしていることは高く評価できる。これらの作業によって、中国語と日本語という個別言語に則った物語論の可能性が強化されたことは言を俟たない。橋本は本論文において、こうした個別言語に注目した研究が、逆に言語を超えて通用する一般的な理論に新たな視座をもたらすものであることを強調しているが、これまで多く語られてきた物語の一般理論が欧米の言語の観察によるものであり、中国語や日本語の物語にはそうした方法論では説明できない特性があるとする指摘は明快であり、本論文によって提示された個別言語に則った物語論のモデルが、これまでの研究に新たな果実を提供し、その領域をさらに深めていくことが期待されるのである。

しかしながら本論文にはいくつか検討を要する問題が存在していることも指摘される。第一に、本論文の表題ともなっている「比較詩学」という概念、および用語の不明確さである。橋本は詩学を解釈学の対立概念として用いているが、アリストテレスに始まる「詩学」の概念規定が不明瞭で、また歴史的背景としても、フランス文学における“*la poétique*”との関連、中国文学における『文心雕龍』の文体論などとの関連にも触れる必要があったと思われるし、用語上も慎重な態度が望まれよう。さらに解釈学を対立する概念とする立場もあまりに性急であろう。これまでの詩学の先達がたとえばアリストテレスにおけるホメロス、ジュネットにおけるブルースト、リクールにおける聖書など、優れたテキストの精密な解釈を基礎に物語論を展開しているのであるが、本論文にはそういう圧倒的な作品解釈という基礎が見当たらないのも説得力に欠ける点である。また「語り」についての分析においては、物語の描写自体への深い言及も求められるのだが、この点は深められておらず、フランス語の時制についても結論を急ぎ過ぎているきらいがあり、さらなる研究が求められる。日本語のタ形とル形に関しても、これまでの日本の研究業績は相当多岐にわたり豊かな内容を持つと思われるのだが、本論文においては残念ながらそれらへの言及はまだまだ不足していると言わざるを得ない。

上述のような弱点は確かに認められるのではあるが、本論文に引用された各言語の膨大なテキストは、その収集分析において高度な語学力と非常な労力を要することは一見して明らかであり、一貫した理念に基づく精密な分析が行われたことは高く評価できる。また本研究によって提示された物語論のモデルが、文法論、翻訳論などの他の研究分野にも寄与することは明らかで、その派生的影響力は容易に想定できる。以上のように、本論文は物語論研究において斬新で意欲的な成果を収めており、博士論文として十分な内容を有していることを認めて、審査員一同、橋本陽介君に博士（文学）号を授与することを推薦するものである。

以上